T2R2 東京科学大学 リサーチリポジトリ
Science Tokyo Research Repository

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	平安時代日本語の語彙の層
Title(English)	Layers in the lexicon of Heian Japanese
著者(和文)	田中牧郎
Author(English)	Makiro Tanaka
出典(和文)	学位:博士(学術), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第9581号, 授与年月日:2014年3月26日, 学位の種別:課程博士, 審査員:山元　啓史,中川　正宣,前川　眞一,赤間　啓之,平川　八尋,近藤　泰弘
Citation(English)	Degree:Doctor (Academic), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第9581号, Conferred date:2014/3/26, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

Powered by T2R2 (Science Tokyo Research Repository)

（博士課程）

論文審査の要旨及び審査員

報告番号	甲第　　号			学位申請者氏名	田　中　牧　郎	
論文審査 審 査 員		氏　名	職　名		氏　名	職　名
	主査	山　元　啓　史	准教授	審査員	平　川　八　尋	准教授
	審査員	中　川　正　宣	教　授		近　藤　泰　弘	青山学院大学教授
		前　川　眞　一	教　授			
		赤　間　啓　之	准教授			

論文審査の要旨（2000 字程度）

本論文は、「平安時代日本語の語彙の層」と題し、9つの章で構成されている。

第1章「序」では、本論文全体を通じ、「古典文献における語の現れ方で語を分類すれば、層が見える」、「語彙の層は、漢と和の2つの要素の対立において明瞭に見える」の2つの仮説を立て、語彙の特性ごとに任意2語の対応関係を分析し、平安時代の語彙体系を「層」という概念によって相対的に記述することを研究目的として述べている。

第2章「方法」では、対象とする文献テキストの解説と採用理由を述べ、それらを電子化、単語分割した上で、品詞情報を付したコーパス（電子資料体）を開発し、それらを特性毎に相互比較し、差異を明らかにする方法を述べている。

第3章「漢文訓読文の語彙と和文の語彙」では、『今昔物語集』（以下『今昔』）巻１２と巻２７が、漢文訓読文と和文の対立を示すことを確認し、これを比較のための基本資料としている。両巻の語彙を相互に比較し、漢文訓読文と和文の違いに基づく特徴語を明らかにした。それにより漢文訓読文と和文にて類似の語が対立して用いられる語（対立語）を特定した。その対立を漢語（混種語を含む）と和語、和語の異品詞同士（特に、感情動詞と感情形容詞）、和語の同品詞同士の３つの類型に分類した。その対立関係は文体的に対比が明瞭であるところもあれば、一方のみに特徴的である場合もあり、和漢の語彙的対立はどの２語の間においても明瞭なのではなく、違いの程度がまばらであることを述べている。

第4章「同文説話の語の対応：『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』」では『今昔』と『宇治拾遺物語』（以下『宇治』）を比較する。両者のパラレルコーパスを作成し、相互の語の対応を網羅的に調べ、文体特徴語を抽出し、対立関係を特定した。これらは第3章の『今昔』巻１２と巻２７の比較よりも、和の層の側に寄った対立であり、語彙の多層体系をより明らかにしている。

第5章「漢語と和語の対立」では対立の第１の類型である漢語と和語の対立について研究した。平安和文における漢語・混種語について、時代ごとの比率と品詞別・意味分野別の新出語の数を調査し、和文で使われる漢語に、時代・品詞・意味分野別の層があることを確認した。つぎに漢文訓読文の説話と和文の説話における語彙の分布を調べ、同じ漢語の中にも多層の体系があることを示した。漢語が属する層に応じて、和語との対立関係の有無や意味の対立に程度があることを述べている。漢寄りの層にある漢語の事例と、和寄りの層にある漢語の事例を取り上げ、それぞれの対立語間の意味を分析した結果、漢寄りの層にある漢語は、和語の広い意味を細かく言い分けていること、一方、和寄りの層にある漢語は、相対的な意味の違いで使い分けられていることを明らかにしている。

第6章「感情形容詞と感情動詞の対立」では、対立の第２の類型である、和語の異品詞間の対立について感情形容詞と感情動詞に焦点をあて比較した。その結果、感情主が１人称の場合には感情形容詞、２・３人称の場合には感情動詞という対立が見られた。述部の形式や主部および従属節に感情の誘因を示す形式にも対立があることを明らかにしている。

第7章「和語の同品詞同士の対立：『おづ』『おそる』の対立」では、第3の類型である、和語の同じ品詞で対立する事例「おづ」と「おそる」を取り上げた。複合する動詞の種類、対象格を示す格助詞およびその関連語句を比較し、そこでの意味の対立を調査した。一般的に時代や文体の異なる文章では、意味によって語の使い分けがみられるが、語彙の層に変化が生じると意味による使い分けにも影響がみられることを明らかにしている。「おづ」「おそる」は、それぞれ感情形容詞「おそろし」との対立があり、それらを2語ずつ取り出して比較すると「おそろし」「おづ」「おそる」の順で和の層から漢の層へ、使われ方が整理できることを述べている。

第8章「総合討議」では、第3章から第7章までの考察を総合し、従来の研究と比較し、「層」という抽象概念を利用することで、従来の絶対的な意味記述からはできなかった相対的な語彙の記述を可能にしたことを述べている。この研究成果にもとに、古典語研究における『今昔』の特徴、古典語のためのコーパス研究の方法論の意義を述べている。

第9章「結語」では第１の仮説が証明されたことを述べている。一方、第２の仮説については語彙の層は明瞭に見えるが、層があるところに必ずしも対立があるわけではないこと、対立は漢語と和語との間だけでなく、和語と和語の間もにあることを述べている。

以上、本研究は、現代人が直感的に記述できない古典語彙の構造を、語の対立関係から相対的に記述したものであり、この方法論は古代語から現代語に至る日本語語彙の歴史的変遷の解明に貢献するところが大きい。よって本論文は博士（学術）の学位論文として十分に価値のあるものと認められる。